

哲学者と思わく愛好者：

プラトン『国家』篇第五卷474c-480a

浅野幸治

序

『国家』篇第五卷末尾で、プラトンは哲学者と思わく愛好者を区別しているが、その根拠は、哲学者の愛の対象は在るものであるのに対し思わく愛好者の愛の対象は在りかつ在らぬものであるということにある。この故にまた、哲学者の認識は知識であり思わく愛好者の認識は思わくであると言われる。では、在るものとは何であり、在りかつ在らぬものとは何のことであろうか。

「在る」という言葉には、普通、存在用法、述語用法、真理用法という三つの用法が区別される。それに応じて、「在るもの」の解釈も、存在解釈、述語解釈、真理解釈という三つの解釈が可能である。本論では、述語解釈の代表としてブラストスの解釈を、また真理解釈の代表としてゴスリングの解釈を取り上げ、彼等の解釈がプラトンのテキストを理解するのに十分でないことを指摘する。もし一つを選ぶとすれば、存在解釈がテキストによって最もよく支持されると思われるが、論者自身の解釈としては、「在る」の三つの用法を融合する解釈を取る。

論者の解釈は、プラトンをプラトン自身の問題関心から読むことによって可能になる。プラトンは主語述語判断を論じているのではなく、プラトンの問題関心は、論者が認知の判断と呼ぶものにある。その例は「ペンがある」であり、後で示すように、そういった判断においては「在る」の存在用法、述語用法、そして真理用法が融合されているのである。

一 存在の三つの用法

まず、「在る」の三つの用法について説明する。「在る」の第一の用法は、存在用法である。例えば、「月がある」という文の中では、「在る」は存在の意味に使われている。「在る」の第二の用法は、述語用法である。例えば、「ソクラテスは長身である」という文の中では、「(で)ある」は、主語の「ソクラテス」と述語の「長身」とを結び付ける働きをする。「在る」の第三の用法は、真理用法である。例えば、「あるが如くに話せ」という文の中では、「ある」にいかなる述語もなく、「ある」は「事実である」ないしは「本当である」という意味に使われている。「在る」の真理用法の主語は、名詞や名詞句ではなく、文である。例えば、「ソクラテスが長身であるということは事実である」。

次に、ソクラテスの議論を要約する。知識は在るものと関係しており、無知は在らぬものと関係している(476e7-477a10)。もし在りかつ在らぬようなものがあれば、それは在るものと在らぬものとの中間にある(477a6-8)。思わくは、知識と無知の中間にある(478c13-d4)。だから、思わくは、在るものと在らぬものとの中間のものに関係している(478e1-6)。ところが、思わく愛好者が認識しているものは、在りかつ在らぬようなものである(479a5-d6)。従って、思わく愛好者の認識は思わくである(479e1-6)。

二 述語解釈と真理解釈

ブラストスの解釈では、プラトンの議論に「在る」とか「在らぬ」とかの表現がそれだけで現われる時には、それに述語Fを補う必要がある⁽¹⁾。述語を補うと、ソクラテスの主張は、知識はFであるものに関係しており、思わくはFでありかつFでないものに関係しているということになる。これは、どういう意味であろうか。

ブラストスは、「実在的な」(あるいは「在る」)という表現の一つの意味は、「知識として信頼できる、欺かない」という意味だと主張する⁽²⁾。だから、ブラストスは、知識の対象であるFであるものを実際に(確かに)Fであるものという意

味に、また思わくの対象であるFでありかつFで在らぬものをFではあるが実際には（確かには）Fでないものという意味に取る。では、述語付けが信頼できるとか信頼できないとかいうのは、どういうことであろうか。例えば、シミアスに高いとすることを述語付けても余り信頼できないのに対し、3に奇数とすることを述語付けたら遙かに信頼できる。その理由は、シミアスが単に偶然的に高いのに対し、3は必然的に奇数だからである。従って、ブラストスの解釈によれば、述語⁽³⁾を必然的に持つような種類のものと、述語を単に偶然的に持つような種類のものと、二種類のものがあるということになる。前者が知識の対象で、後者が思わくの対象なのである。

次に、ゴスリングによれば、知識は真であるものと関係しており、思わくは（部分的に）真であり（部分的に）偽であるものと関係している。ゴスリングの解釈は「在る」ということの真理解釈であり、真であつたり真でなかつたりするものは、対象ではなく命題である。真であるものは、Xとは何かの問いに答える真なる説明であり、（部分的に）真であり（部分的に）偽であるものとは、「Xとは何かということを説明しているわけではないが、かといって全然Xではないものを説明しているわけでもない」⁽⁴⁾のようなXの説明である。例えば、正義は負債の返済であるという説明は、いくつかの正しい行為を説明しているが、それで説明されない正しい行為もある。そういった説明は「正解に近い」説明であり、例えば、正義は眼鏡であるという説明よりは遙かに優れている。けれども、その説明は正解に近いだけであり、正義の正しい定義ではない。正義の正しい定義は、すべての正しい行為かつそれらだけを説明する統一的な定義でなければならない。

では、思わく愛好者とは一体誰であり、彼等の主張とは何であろうか。ゴスリングによれば、思わく愛好者とは、単に非哲学者一般ではなく、思わく愛好者とは勉強家（475e1）であり、技芸の愛好者であり実践家達（476a10）である。一言でいえば、正義とか美とかその他のことについて主張を持った人達である。例えば、そういう人達は、「週末の映画客のように単に暇潰しのために」⁽⁵⁾祭典に行くので

はなく、「カンヌ映画祭に映画の研究にやってくるような人達である」(6)。そういう人達の発見の一つは、「様々に記述される対象が美しい」(7)ということであり、もし誰かが美の単一の説明を要求したら、その人達はそういう要求を「洗練されていない無教育な」(8)ものとする。その人達は実践家達で、このXにはこの説明あ、そのXにはあの説明といった具合にXについて多くの説明を与えるが、それらの説明は人間の「行動と直接関係」(9)している、その人達は、Xの説明がXのあるトークンには真であるけれども別のトークンには真ではないということ喜んで認めるのである。

三 述語解釈と真理解釈の批判

次に、上の解釈の批判に入る。まず第一に、ゴスリングは、思わく愛好者をものごとを定義しようとする専門家に限定する点で間違っている。479d3でプラトンは、思わく愛好者のことをホイ・ポロイ (hoi polloi) と呼んでいるが、ホイ・ポロイとは、「多数、大衆」(10)を意味する。従って、思わく愛好者の思わくも、Xとは何かという問いに答える説明に限定する必要はない(11)。

第二に、ゴスリングの解釈と異なり、ソクラテスは、哲学者は知識が関係しているものに喜びを覚えそれを愛し、思わく愛好者は思わくが関係しているものに喜びを覚えそれを愛すると言っている(479e10-480a1)。命題は、愛の対象であり得るとは余り思えない。我々が楽しむものは、音楽や美しい景色であって、それらについての命題ではないからである。従って、知識や思わくが関係しているものは、命題ではなく対象であると考えられる(12)。

第三に、しばしば見逃されている点であるが、ソクラテスは「在らぬもの」という表現で一体何を意味しているのであろうか。ソクラテスは、在らぬものを思いなすのは不可能であると言っている(478b6-c2)。ブラストスやゴスリングは、在らぬものを思いなすことが不可能ということはどう解釈できるであろうか。ブラス

トスの場合、「在らぬもの」というのは、決してFであることなくFでないもの、即ち必然的にFでないもののことであろう⁽¹³⁾。けれども、必然的に偶数ではない3という対象を思いなすことは可能である。もし3は偶数であるという判断が必然的に奇数である3と同一の対象に関係しているのでなかったら、どうしてその判断が必然的に偽になるであろうか⁽¹⁴⁾。3が偶数であるという判断が必然的に偽であるのは、同一の3が必然的に奇数であるからである。

ゴスリングによれば、知識の内容は真であるもので、思わくの内容は部分的に真であり部分的に偽であるものである。では、「在らぬもの」という表現の意味はどうなるであろうか。「『国家』篇第五卷：タ・ポラ・カラ」という論文の中では、ゴスリングは、「(Xとは何かという問いに対する) 思わく愛好者の関心さえも持っていない人は、その問いに関して無知の状態にある」⁽¹⁵⁾と言い、無知がXとは何かという問いに対して関心も答えも持っていない状態であると考えているように思われる。従って、ゴスリングの場合、「在らぬもの」という表現は、誤った答えであるという意味においてではなく、全く答えではないという意味において真でないものを意味する。つまり、無知な人というのは、Xとは何かという問いに対して何ら答えを持っていない人のことである。しかし、「プラトンの『国家』篇におけるドクサとデュナミス」という別の論文では、ゴスリングは、無知は「問題に全く気がついていないことというよりも何か非常に間違った答え」⁽¹⁶⁾のことであると言い、無知にも判断内容があると考えているように思われる。例えば、「知識は眼鏡である」と言う人は、確かに何かを言っているのであり、ただ言っていることが知識に関して非常に間違っている訳である。けれどもゴスリングは、すぐに、これが判断であるのかということを疑い、判断というよりはむしろ雑音であると言っている⁽¹⁷⁾。従って、いずれにしても結局、無知な人は何も言うことがなく、「在らぬもの」という表現は、偽なる思わくであるものという意味ではなく、全く判断でないものという意味において真であらぬものを意味する。従って、「在らぬもの」という表現は、無知に関係した判断が存在しないことを意味すると思われる。

つまり、無知が判断でないものに関係しているというのは、無知が関係しているものが何（または、何の内容）もないという意味になる。

そうすると、「在らぬもの」の存在解釈に導かれるように思われる。そこで、ソクラテスが在らぬものを思いなすことが不可能であると主張する箇所のテキストを詳しく見てみることにする。ソクラテスとグラウコンの会話である。

「では、（思わくは）＜在らぬもの＞を思わくするのだろうか？それとも、在らぬものを思わくすることは不可能だろうか？次の点を考えてみてくれ。思わくする人は、その思わくを何かに差し向けるのではないか？それとも、思わくはしているが何も思わくしていないというようなことが、可能なのか？」

「不可能です。」

「では、思わくしている人は、すくなくとも何か一つのことを思わくしているのだね？」

「ええ」

「しかるに、＜在らぬもの＞は、＜何か一つのもの＞であるとは言えないね？＜何もないもの＞と呼ぶのが、正しいだろう？」⁽¹⁸⁾ (478b6-c2)

ここでソクラテスは、在らぬものを何か一つのものとは対比させ、在らぬものを無と同一視している。「思わくしている人は、何かを思わくしているのか、それとも何もないものを思わくしているのか？」という問いは、思わくの対象の存在、非存在を尋ねている問いな訳である。だから、「在らぬもの」という表現はここでは、存在しないものということの意味する。もし「在らぬもの」という表現が存在しないものを意味するならば、在らぬものを思いなすことは不可能であるという主張も容易に理解できる。存在しないものについては、思わくや思いなしを持つことは不可能である。だいたい、そういったものは、名指すことさえできない。名指しの対象がどこにも存在しないので、名指そうとしても、名指しは言わば無の中に消失してしまうのである。ソクラテスは、在らぬものという表現で決して在らぬものを意味しており (477a3-4)、それはあらゆる仕方で不可知である (477a4)。いかなる

記述も述語付けも、存在しないものを名指すことはできないので、存在しないものについては真ではありえない。こうして、在らぬものはいかなる仕方でも不可知である訳である(19)。

四 存在の三つの用法の統一——認知の判断

今、「在らぬもの」という表現が存在しないものということの意味することを見た。とすると、「在るもの」という表現は存在するものを意味するであろう。それでは、「在る」という表現の存在解釈は、述語解釈や真理解釈を産む元となった解釈上の困難をどう克服できるのであろうか。問題点は二点ある。

論者は、この問いに答えるに当たり、まず、「在る」という表現の三つの用法の区別に異議を唱え、「在る」という表現の三つの用法の統一性を主張する。まず第一に、もし何かが存在すれば、それは何かFである。言い換えれば、何かが存在すれば、それには何らかの属性、存在の現われ方があり、もし何の属性もないならば、存在するとは言えない。また、もし何かFであれば、何かFが存在する(20)。従って、「在る」という表現の存在用法と述語用法とは、相互に含意し合う。第二に、もし何かFであれば、それがFであるということは真である。また、もし何かFであるということが真であれば、その時それはFである。従って、「在る」という表現の述語用法と真理用法とは、相互に含意し合う(21)。従って、何かFが存在する時その時にのみそれはFであり、それがFである時その時にのみそれがFであるということが真である。このように、「在る」という表現の存在用法、述語用法、および真理用法は、相互に等しいということになる。

479a5-d6において「在る」という表現の存在解釈を取れば、ソクラテスは、多くのFがFでありかつFであらぬという同意からそれらが存在しかつ存在しないという結論に動いていると思われる。しかし、プラトンは「在る」という表現の存在用法と述語用法を混同しているのではない。では、どうしてソクラテスが「在る」

という表現の存在用法を述語用法から区別しないのであろうか。まず第一に、ソクラテスは、例えば、シミアスは高くないという同意からシミアスは存在しないという結論へと動いている訳ではない。論者の知る限り、注釈家達の誰もこの箇所でのソクラテスの正確な言葉使いに注意を払っていない。ソクラテスは、多くのFがFでありかつFであらぬと言っている。ソクラテスの言葉の特徴は、主語と述語が両方ともFであることである。だから、ソクラテスは、ある主語について一つの述語を否定することから、その主語の非存在を結論しているのではない。「FがFである」とか「FがFであらぬ」というのはどういう種類の判断であらうか。考えられるのは、ソクラテスが主語－述語の判断ではなく、論者が認知（発見）の判断と呼ぶものを念頭においているということである(22)。

認知の判断(23)には、「在る」という表現の存在用法を使用する。例えば、箱を開いた時に、その中にペンを見つけるとする。そうすると、我々は、「ペンがある」と言う。「在る」という表現の述語用法もこの中には含まれている。というのは、我々は、そこに見つけたものをペンであると認めているからである。従って、「ペンがある」という文は、「ペンであるものがある」と分析できる。この文を主語－述語の形にあえてするとすれば、「ペンはペンである(24)」となる。これは少し奇妙に思われるかもしれないが、これこそソクラテスがFはFであるという時に意味されている事柄である。つまり、ペンとして認知したものについてペンであると述語付けているのである。しかしながら、もしそれがペンでないことが解ったら、「ペンはない」と言うことができるし、また言うべきである。このようにして、述語の否定が、その述語の下で認知されたものの存在の否定につながるのである。

同じ箇所、ソクラテスは、思わく愛好者が認知し愛する多くのFがFでありかつFであらぬという同意事項を前提とするが、思わく愛好者は本当にこれに同意するのであろうか。ゴスリングは、「議論の相手（思わく愛好者）が、すべての正しい行為がまた不正だとも現われるという主張を受け入れるということは、全く明ら

かではない」⁽²⁵⁾から、この議論の前提は妥当ではないと主張する。しかしまず、ソクラテスの言っていることをよく見てみる必要がある。

それら多くの美しいもののなかに、醜くあらわれる (phanesetai) ことのけっしてないようなものが、はたして一つでもあるだろうか。(479a5-7)

どうして多くのFはFでないのであろうか。ソクラテスの主張は、時間に関わる主張であり、多くのFはすべて遅かれ速かれFでなくなるだろうというものである⁽²⁶⁾。確かに、テキストの中で未来時制が一度使われただけでは、この解釈を保証するものではない。しかし、多くのFをFそのものとの対比で見تينることにする。上の問いに先立ち、ソクラテスは思わく愛好者に次のように呼び掛ける。

あの有能な男、美そのものを認めず、恒常 (aei) 不変に同一のあり方を保つ美のアイデアというものがあつことをまったく信じないで、多くの美しいものだけを認める男、あの男をして語らせ、答えしめよ。(478e7-479a3)

永遠である美そのものと対比する時、多くのFの時間性は明らかである。従つて、ソクラテスは、多くのFはFでなくなるだろうと言っている訳である。この主張は、明らかだと思われる。思わく愛好者は、彼等が愛する多くのFが生成したのだからまた消滅するだろう⁽²⁷⁾という主張に反論しないであらう。

そうすると、ソクラテスは、多くのFはFでなくなるだろうという同意事項から多くのFは今Fでないという結論に動いているように思われる。これは、正当であらうか。多くのFはFでなくなるだろうということが認められたとして、それはどういうことを意味するのであらうか。それは、多くのFはFである時にも本性的にFである訳ではないということの意味する。多くのFは、自分自身で存在しているのではないのである。もし本性的にFであれば、Fでなくなる理由はないであらう。但し、ソクラテスは、多くのFの本性については余り何も語らない。代わり

に、グラウコンが次のように言っている。

いろいろの事物もやはり、どちらにでもとれるような性格のものであって、そのなかのどれ一つとして、在るとも、在らぬとも、そのどちらであるとも、どちらでもないとも、しっかりと固定的に考えることはできないのですからね。(479c3-5)

多くのFは、在るものと同じではない。また、在らぬものと同じでもない。同時に在るものと在らぬものとの両方であることもできない。けれども、在ることもないし在らぬこともないということは、不可能である。多くのFは、在るものと在らぬものとの中間であって、存在を在るものと共有し、非存在を在らぬものと共有している。

従って、ある意味では、多くのFは、それら自身では本性を持たない。しかしある意味では、多くのFは、本性をFそのものから派生的に持っている。つまり、多くのFは、無ではなく、不可知ではない。それらは、ある種の不完全な仕方で知られ、それをプラトンは思わくと呼ぶ。それらは、Fそのものをかいま見させてくれ、そして消え去る。それらは蜃気楼のようなもので、Fそのものを認める哲学者を欲求不満にする。しかし、Fそのものを認めない人達は、多くのFをただ追い求める。多くのFしか、思わく愛好者には見えないからである。

<注>

- (1) G. Vlastos, 'Degrees of Reality,' in his *Platonic Studies* (1973), p. 63, n. 21.
- (2) Ibid., p. 63.
- (3) 述語とは、第一には言語上の概念であるが、「述語」という表現をここでは主として対象が所有する性質という意味で使う。
- (4) J. C. Gosling, 'Doxa and *Dunamis* in Plato's *Republic*,' *Phronesis* 13 (1968), p. 125.
- (5) Ibid., p. 121.
- (6) Ibid.
- (7) Ibid., p. 122.
- (8) Ibid., p. 121.
- (9) Ibid., p. 123.

- (10) H. G. Liddle and R. Scott (revised by H. S. Jones), *Greek-English Lexicon* (1968). F. C. White, 'J. Gosling on *ta polla kala*,' *Phronesis* 23 (1978), pp. 130-1 も参照。グラウコンは、聴くことを愛好する者（思わく愛好者）は「哲学者のうちには数えられるにしては、何かあまりにも奇妙すぎる人達ですからね」（475d3-4）と言っているが、何らかの技術の専門家を哲学者と呼ぶことは、ギリシア語では奇妙ではないであろう。専門家とは、技術の関わる対象について議論する能力のある人であり、議論する能力は、哲学者の特徴だからである。また、ソクラテスは、大衆ともう少し気のきいた人々を区別して、前者は善を快樂であると考えてるのに対し、後者は善を知恵であると考えている（505b5-6）。
- (11) ノミマ (nomima) には、何であるかの説明以外の思わくも含まれるか、思わく愛好者の思わくにはノミマ以外の思わくも含まれるか、またはその両方。論者には、479d4 のノミマは、479a3 の *polla ta kala*（多くの美しいもの）と同じであるように思われる。
- (12) 思わく愛好者は、見物の愛好者（475d2）、聴くことの愛好者（475d3）とも呼ばれるが、彼等は、恐らく、金銭の愛好者と呼ばれる人達（第9巻580d11-581a1）と同じ人達であろう。金銭の愛好者とは、食べ物や飲み物や性愛やその他それに準ずるものの快樂を愛好する人達のことであり、金銭の愛好者と呼ばれるのは、彼等の快樂が何よりも金の力によって遂げられるからである。食べ物や飲み物や性愛の愛好者は、明らかに、欲望の対象または快い感覚に喜びを覚えるのであって、何らかの命題に喜びを覚えるのではない。ちなみに、「見物の愛好者」と「聴くことの愛好者」とが視覚や聴覚に訴えた記述であるのに対して「食べ物や飲み物や性愛の快樂の愛好者」が触覚に訴えた記述であるのは、興味深い。
- (13) ブラストスは、知識や思わくは対象と関係していると考えているように思われる。しかし、ブラストスの場合、信頼できたり信頼できなかつたりするのは、第一には命題である。従って、ブラストスは、ギリシア語の「知る」や「思わくする」という表現が対格の目的語と目的節の両方を取ることができるという曖昧さを忠実に残していると言える。
- (14) ソクラテスは、また、在らぬものを知ることは不可能であるとも言っている（477a1）。「在らぬもの」が必然的にFでない対象を意味したら、ソクラテスは、例えば、必然的に偶数でない数字の3という対象を知ることは不可能であると言っていることになるであろう。しかし、確かに、必然的に奇数である数字の3という対象を知ることは可能である。従って、「在らぬもの」は、必然的にFでない対象という意味ではない。
- (15) Gosling, '*Republic Book V: ta polla kala etc.*,' *Phronesis* 5 (1960), p. 123.
- (16) Gosling, '*Doxa and Dynamis in Plato's Republic*,' p. 125.
- (17) *Ibid.*, p. 127.
- (18) 翻訳は、藤沢令夫訳（岩波版プラトン全集第十一巻、一九七六年）を参考にした。
- (19) 完全に在るものは完全に可知的であるのに対し全く在らぬものは全く不可知的であるというソクラテスの表現（477a3-5）は、在り且つ在らぬものは中間的または不完全に可知的であるということを示唆する。これは、思わくが不完全な知識であるということ、つまり思わくの対象は何らかの仕方で可知的ではあるが、そういった認識は本当の知識ではないということである。
- (20) これは、何ら奇怪なことではない。実際、論理学では、「何かがFである」を「F

- であるような何かが存在する」というふうに記号化する。
- (21) 即ち、何かがFである場合その場合にのみそれがFであるということは真である。これは、タルスキの規約Tに同じである。A. Tarski, 'The Semantic Conception of Truth,' in *Semantics and the Philosophy of Language*, ed. by L. Linsky (1952).
- (22) マクドウェルは、『テアイテトス』への注釈の中で、プラトンは『テアイテトス』の偽なる思わくの可能性についての議論の中で同一性の判断を念頭に置いていると指摘している。J. McDowell, *Plato, Theaetetus*, および 'Identity Mistakes: Plato and the Logical Atomists,' *Proceedings of the Aristotelian Society*, N. S. 70 (1969-70), pp. 181-96. 確かにプラトンは『ソピステス』の中では主語と述語が判断の二つの構成要素であると言っているけれども、『テアイテトス』の議論はプラトンが『ソピステス』以前に基本的と見なした判断形式を示している。
- (23) 存在論的には、認知の判断は、性質の現われである。
- (24) または、ペンであるものはペンである。
- (25) Gosling, 'Republic Book V: *ta polla kala* etc.', p. 119.
- (26) 多くのFがFでありFでないのは、この仕方に限られない。『饗宴』では、(一) 別々の点で、(二) 別々の時に、(三) 別々のものとの関係において、(四) 別々の所でと、多くのFがFでありFでない四通りの仕方を挙げている (210e6-211a4)。
- (27) これが、思わく愛好者が美しいものから美しいものへと忙しく移って行く一つの理由である。

(あさの こうじ・阪南大学非常勤講師)

(付記 本論文は、『東北哲学会年報』第10号(1994年)、15~27頁で発表したものである。)